

<前回>科学技術の神学と聖書学

(1) なぜ聖書学か

1. 現代の環境危機、3・11の東日本大震災において発生した原発事故。
キリスト教思想においても、科学技術の在り方を根本的に再考する必要性。
しかし、長年の自然の忘却はいまだ大きな後遺症を残している。
2. キリスト教=多元的多形的な事象。
特定の教派や思想家がキリスト教全体を単純に代表できないことは明か。また、科学技術もきわめて多様。
3. キリスト教の多様性 → 聖書テキストへ、聖書学という方法論の意義
4. 科学技術の多様性 → 人間存在へ
科学技術の主体としての人間に注目。
5. 聖書テキストから人間存在の基礎理解を取り出す。
聖書の創造物語と、存在論・人間学という二つの軸を設定する。

(2) 聖書の人間理解、聖書から人間存在へ

6. 創造物語の人間存在理解の基礎テキスト
↓
- ①神の像/支配(創世記一章)
- ②土の塵/耕す/命名(創世記二章)
- ③墮罪(創世記三章)
7. ティリッヒ: 有限性と疎外、本質と実存との二重性を、人間的生(=人間の現実存在)の両義性と解する。
人間存在の行為としての科学技術は両義的である。
8. 両義性を前提にすると、最近の話題あるいは問題との関連で次のような問いが生じざるを得ない。原発は悪、i P S細胞は善といった議論は可能か、あるいは原子力について兵器と平和利用の分離・区別は可能か。

(3) 科学技術の両義性から歴史性へ

10. 原初の人アダム=耕す人(農民)+名づける人
科学技術の原型、人間存在の本来性(創造の善性)に属する
11. 科学技術の善性=光
福島原発事故以前の原子力の平和利用という議論、現代のi P S細胞について流布している「善」というイメージ。
12. 科学技術の影の側面: 聖書における文明批判。
前提としての聖書における墮落物語
13. 人間存在の存在論的考察の限界=歴史的パースペクティブの必要性
近代以前と近代以降との間に生じた科学技術の質的变化
人間存在の両義性における疎外・歪曲面の作用がその効果を顕在化した。
14. 近代という時代、まさに20世紀、劇的な仕方で前面化する。
15. ハンナ・アーレント『人間の条件』とパウル・ティリッヒ「宇宙探検が人間の条件と態度に対して与えた影響」
16. ハンナ・アーレント『人間の条件』の書き出し。

「一九五七年、人間が作った地球生まれのある物体が宇宙めがけて打ち上げられた。この物体は数週間、地球の周囲を廻った。」(アーレント、1994、9)

スプートニク一号の成功が「重要性からいえば、もう一つの出来事、核分裂にも劣らぬこの事件」(同所)であるとした上で、その意義・問題性を、「人間の条件」との関わりで論じている。

↓

20世紀の科学技術は、「人間の条件」を大きく変容させようとしている。

17. 人工衛星が目指す宇宙空間は、「人間の条件の本体そのもの」である地球(=大地)から切り離された空間領域であり、ここに顕在化しているのは、この「人間の条件から脱出したいという望み」(同書、11)(=欲望)である。

大地から脱出したいとの欲望こそが、「人間の寿命を百歳以上に伸ばしたいという希望」、そして原子力と遺伝子工学との背後にあるもの。

創世記3章の墮罪物語は、この「人間の条件」(=人間存在の有限性)からの脱出の欲望との関わりで解することが可能。「食べたい」として目覚めた欲望。蛇はアイコンあるいはスイッチ。

科学技術の影の側面はこの欲望の現象形態にほかならない。

暴走する欲望と資本主義の関係は？

18. ティリッヒの講義「宇宙探検が人間の条件と態様に対して与えた影響」(『宗教の未来』)。「宇宙探検が人間そのものに与える影響」と「宇宙探検が人間の自己理解に与える影響」(ティリッヒ、1999、42)

(4) 科学技術の肯定論と文明という視点

22. 再度、科学技術の両義性の光の面 → 神の創造行為の器としての科学技術

23. 賀川豊彦

「もしも私たちが神に帰依し、手足を動かすことを拒み、それでいて神は私たちを助けてくださるだろうと信じているとすれば、それは迷信以外の何ものでもない。結局のところ、信仰とは神による可能性を信じることである。この可能性を信じることでそれが人間の活動を要求する」(賀川、2009、45)、「愛は人間のチャンネルを通して流れ出る神の働きなのである」、「贖罪愛は全体的な意識、即ち神意識から出る。だから、神より来るものである。この愛は、人間の意識のチャンネルをとおして流れ出るが、神の意図に従っている」、「私たちが私たち自身をとおして神に働いてもらうようにするのでなければ、神ご自身もその可能性を実現することはできない。」(同書、46)

24. 神と人間との関わり、特に神の摂理と人間の自由との関係性というキリスト教神学の古典的な問題。

賀川：神の意識・働きが人間の意識・行為に媒介されて現実化すること、神の可能性を信じその実現のために行う人間の働きのなしに、神の摂理が自動的に実現すると考えるのは神を機械仕掛けの神にする迷信であることを主張する。この人間の行為には、当然科学技術も含まれている。

25. 再度、創造論へ。

キリスト教創造論：一回的な天地創造(原初的創造 *creatio originalis*)以降、神は創造行為を継続している。世界の存立を支え続け(継続的創造 *creatio continua*)、世界を完

成へを導く(完成する新しい創造 creation nova)。

神の救済行為もいわば第二の創造という特徴を有している。 cf. 理神論

26. 賀川が、神の愛は人間の行為というチャンネルを通して実現すると語る場合に問われていたのは、この継続的創造。神は、実に進化のプロセスを介して間接的にしかも確実に世界に作用を及ぼすことができる。神の創造行為が、生命世界のプロセスを超えて、人間の歴史的営みを通して継続されると考えることは不可能ではない。
27. フィリップ・ヘフナー：「創造された共同創造者」(the created co-creator)。
人間は神の被造物であるが、神の行為が現実化することに自らの創造的な行為において共同する存在者、神の創造行為に参与する者であるということ。
この人間の行為には、科学技術が含まれており、神は科学技術を通してその創造行為を継続し世界プロセスを導き続けている。
28. コール＝ターナー：「創造された共同創造者」に依拠した科学技術論の問題点を確認。

3. エコロジーの神学 1

(1) エコロジーの神学の成立と展開

「今世紀初めの数十年にわたり、キリスト教の擁護論者たちは科学と技術がともにキリスト教を母体にしてできたものであることを立証したいと特に熱望した。・・・ところが皮肉にも、このキリスト教が今や極悪非道な技術の生みの親として非難の矢面に立たされているのである。」(J・パスモア『自然に対する人間の責任』岩波書店、16頁)

環境学の現状

環境危機は、人類が直面している最大の問題の一つであり、環境学は自然科学から人文社会科学まで多くの学問分野を包括する仕方で進展しつつある。これまで環境の神学(エコロジーの神学)は、隣接の環境倫理から多くのインパクトを受けて進められたきたが、今や哲学的倫理的な環境思想、あるいは自然科学的な生態学を超えて、政治と経済の領域を包括した環境学を射程に入れることが求められているのである。環境学の広がり、二つの岩波講座『地球環境学』(全10巻、1998-99年)と『環境経済・政策学』(全8巻、2002-2003年)などから確認することができる。たとえば、加藤尚武は、多岐にわたる環境倫理学の問題を、自然の生存権の問題、世代間倫理の問題、地球全体主義の三つとしてまとめているが(加藤尚武『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー)、「地球の生態系が閉じた有限な世界である」という地球全体主義の認識は、この有限性の内部における資源とエネルギー(そしてゴミ処理や二酸化炭素排出など)の配分とその正義という問題の解決を要求する。この正義の配分をめぐる利害対立こそが、地球規模の環境論的合意形成を妨げている南北問題の核心を成しており、したがって環境問題を真剣に考えるとき、政治と経済の問題は避けて通れないことになる。環境危機というテーマに関しても、聖書の社会教説は、環境学との関連で、政治と経済についての社会科学的議論へ至らざるをえないのである。

「環境の神学」の歴史

キリスト教思想における環境論の取り組みについて、その歴史を概観しておこう。キリスト教における本格的な環境論は、現実の環境危機が進展する中、いわば外部からの問題

提起によって開始された。リン・ホワイトは、論文「現在の生態学的危機の歴史的起源」（1967年、『機械と神——生態学的危機の歴史的起源』みすず書房、に所収）において、キリスト教がユダヤ教から受け継いだ「創造物語」と、そこに現れた「人間中心主義」が「人間が自分のため自然を搾取する」ことを正当化したという問題提起を行った。「自然は人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が退けられるまで、生態学上の危機はいっそう深められつづけるであろう」というキリスト教思想全体に突きつけられた問いへの対応をめぐって、1980年代までのキリスト教的環境論（聖書学からキリスト教思想史や教義学までを含む「環境の神学」）は多くの議論を展開することになったのである。争点は、「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。』（創世記1章27～28節）における「地の支配」の意味、あるいは聖書の創造物語と環境危機・自然搾取との関係をいかに解するのか、ということであった。詳細は省略せざるを得ないが、次に引用する、パスモア（『自然に対する人間の責任』岩波書店、原著1974年）、リートケ（『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、原著1979年）、モルトマン（『創造における神——生態論的創造論』新教出版社、原著1985年）などからわかるように、1980年代半ば頃までには、研究者は次のような合意に達したと言ってよいであろう。つまり、聖書の創造物語における「地の支配」は実質的には「地の管理」にすぎず、そこに現代の環境危機を引き起こした自然の搾取者・専制君主のイメージを読み込むことは困難である、と。

「西欧には、自然は人間のためにのみ存在するのであるから人間は思いのままにこれを利用することができる、という強力な伝統はたしかにある」が、「けれどもこの態度を『創世記』にまでさかのぼって見ようとすると、かれらの間違がある。」（パスモア）

「人間と自然の間には質的連続性があり、それは、人間と自然との間の差異（その存在は否定されない）より重要である。」（リートケ）

「確かに現代文明を形成する力への意志、増大と進歩への意志は、しばしば聖書の創造論の助けによって公認された。しかし、この事後になってからの公認は、聖書そのものの中に決して根拠を持っていない。」（モルトマン）

環境危機は、創造論に遡及するというよりも、むしろ神学的には罪論と関連づけるべきであり、近代以降の科学技術文明の進展によって引き起こされたものなのである——西欧キリスト教はこの近代文明と密接な関わりがあり、その点で、確かに環境危機に一定の責任がある一。

このように、1960年代から80年代の環境の神学の中心が、環境危機の根本原因をめぐり創造論に置かれていたのに対して、1990年代から2000年代にかけて、議論は、しだいに、創造論から終末論へと拡張されることになる。そこで問われたのは、環境危機の原因にとどまらず、環境危機を克服するビジョンをキリスト教は提供できるのかという問題である。ヘッセルとリュースー編の論集『キリスト教とエコロジー——地球と人間の幸福を求めて』（2000年）は、20世紀の環境の神学のいわば集大成とも言えるものであるが、聖

書学的な議論を収録した第二部では、ヨハネ黙示録の終末叙述が環境論的にいかに評価できるか、キリスト教的終末論は反エコロジカルか、という問いをめぐって、キャサリン・ケラーとバーバラ・ロッシングとの間で対照的な議論が展開されている。二人のヨハネ黙示録解釈の方法と視点は異なっており——ケラーはポスト構造主義的また構成的神学、ロッシングはディーター・ゲオルギの影響を受けた聖書学——、その結論も相違する。「もはや海もなくなった」(黙示録21章1節)に関する解釈としては、私はローマ帝国への政治・経済批判という文脈で読むロッシングに説得力を感じるが、二人の議論に、ディーブ・エコロジーと社会的エコロジーとの対立を重ねるならば、両者の違いは環境思想の中心的な争点に関わることがわかる。

環境の神学は、近年さらなる展開を見せ、環境論との関連性は聖書全体へ広がりつつある。たとえば、パウロと環境論との関連性について、イギリスのエクセター大学のプロジェクト「環境論的倫理における聖書の使用」(イギリスの「芸術と人文学の研究委員会」の財政補助を受けた)では、環境論的課題との関わりにおいてパウロ書簡を使用することが試みられている——これは、聖書学と神学との積極的な関連づけを意図している——。キリスト教神学の形成に対してパウロ書簡の果たした役割を考えると、本格的な環境の神学にとって、この議論の展開は当然と言える。そして、このプロジェクトの中心的人物が、D・ホレル(David G. Horrell)なのである。

ここまでは、「第8回 現代神学の環境——聖書の社会教説から社会科学へ3」(『福音と世界』2017.8、の前半部分)

<まとめ>

Dieter T. Hessel, Rosemary Radford Ruether,

Christianity and Ecology. Seeking the Well-Being of Earth and Humans, Harvard University Press, 2000.

「創造論から終末論へ」: 1960～80年代→1980年代以降

Q1:聖書・キリスト教は環境破壊の原因か。両者の関連性はいかなるものか。

Q2:聖書・キリスト教は環境破壊の克服にいかに貢献するか。

David G. Horrell, Cheryl Hunt, and Christopher Southgate,

Greening Paul. Rereading the Apostle in a Time of Ecological Crisis, Baylor University Press, 2010.

David G. Horrell, Cheryl Hunt, Christopher Southgate, and Francesco Stavrakopoulou,

Ecological Hermeneutics. Biblical, Historical and Theological Perspectives, T & T Clark, 2010.

「聖書テキストから神学へ」: 2000年代以降

Q3:聖書の環境論をキリスト教思想全般(教義学から倫理学まで、組織神学から実践神学まで)へといかにして接続するのか。

媒介領域としての、環境論・環境思想、歴史神学。

(2) 聖書の創造論・終末論

<ヒーパート>

1. Theodore Hiebert, *The Human Vocation: Origins and Transformations in Christian Traditions*

(1) 創造物語における人間の使命の二つのイメージ(pp.135-141)

- ・ヒーバートは、創世記第1章(1.1-2.4a)の第一創造物語をP資料、創世記第2章(2.4b-3.24)の第二創造物語をJ資料とする資料仮説に依拠し、それぞれの資料の背景に、それを伝承する社会層(社会的文脈・歴史的な文脈)を想定する。P資料は、古代イスラエルの祭司共同体に関連し、古代イスラエル王権を背景とする。それに対して、J資料は、古代地中海高地の農民層の経験と結びついている。
- ・P資料が描く人間の使命は、「支配」(dominion)という言葉(ラーダ、カーバシュ)、また「神の像」という思想において表明されている。人間の大地に対する関係は、祭司が社会において果たす役割に対応づけられる。
- ・J資料の描く人間の使命は、Pとは対照的である。人間の原型は、エデンの園を耕す農夫であり、アダム、アダマという用語において示される。ここにおける人間の特徴は、他の動物との連帯・運命の共有という点に認められる。土、命の息という生きた人間の基盤は、動物も共有する(Gen.7:22)。人間の使命は、「耕す」(アーバド)ことであり、それは、「使える」「奉仕する」という大地への従属性において描かれる。

<キャサリン・ケラー>

5. キャサリン・ケラー(Catherine Keller)の「もはや海はない—終末のカオスの喪失」(No More Sea: The Lost Chaos of the Eschaton. pp.183-198)の問題提起の意義。
6. キリスト教におけるtehom(深み・海、カオス)恐怖症(tehomophobia)
 - ・ケラーがまず注目するのは、ヨハネ黙示録21:1-4の「もはや海もなくなった」として描かれる終末のヴィジョンである。ここで描かれる「希望」は、自然の救済(自然を救済すること)ではなく、自然からの救済になってしまっている。フェミニスト神学によって批判される「他世界的な終末論」(otherworldly eschatology)によって、歴史的地上的なヘブライ的信仰がはかないものと死からの逃避の空想に転化されているという問題。
 - ・このヴィジョン(黙示録的なカオス・海の殺戮)は、現代の現実の海の姿である(186)。
 - ・ヨハネ黙示録で生き生きと描かれる海は、経済的不平等と環境破壊が手を携えて進行する領域であるが、その背後には、古代バビロニアの神話伝統が存在する。
 - ・問題(構築的神学からの): 深みをデーモン化することもあるいは抹殺することもないようなカオス愛好的な(tehomophilic)キリスト教的希望はあり得るのか。
7. カオスをめぐる二つの伝統
 - ・創世記1章の「カオス」から「無からの創造」論へ。カオスの無化。
 - ・聖書には、カオスについての別の伝統が存在する。ヨブ記。
8. 環境・体系的な神学(An ecosystemic theology)の課題: 「終末論を反復したり斥けたりするのではなく、それを再利用し根拠付け深めること」(192)
9. 現代のカオス理論を参照すること(193-195)。

<バーバラ・ロッシング(Barbara R. Rossing)>

「新しいエルサレムにおける生命の川: 地上の未来に対する環境論的ヴィジョン」

11. ロッシング: シカゴのルター派神学校の新約学の教授、ヨハネ黙示論解釈の専門家。

12. ロッシングの問題意識は、ケラーなどにおいて見られるように、黙示録を非環境論的であると解釈する(黙示録への懐疑論)のとは別の解釈の可能性、むしろ、ヨハネ黙示録を環境論者でフェミニストの新約聖書学者として積極的に読解することを目指している。この点で、まさにケラーとは対照的であり、両者の議論を読み比べることが有益と思われる。「黙示録の目的は人々に強く勧め勇気を与え、神の審判と救済を宣言し、希望と正義のヴィジョンをもたらすことなのである。」(207)
13. そのためにロッシングが注目するのは、黙示録が提示する、バビロンとエルサレムという対照的な二つの都市のヴィジョン、二つの対照的な政治経済学のヴィジョンである。

- ・ローマ帝国の「現実化した終末論」(永遠のローマ、ローマの平和)。

ローマ帝国のグローバルな全能性は地中海の海洋交易が支えていた。黙示録は、このローマの全能と永遠性を転倒している。「バビロンの売春に対する黙示録の批判は、性的ではなく、ローマの搾取的な貿易と経済支配に対して隠喩的に向けられている。」(209)、「奴隷制と奴隷取引に対するもっとも明確な批判」、森林伐採(17:16)

- ・バビロンに対する新しいエルサレム、「もはや海はない」(21:1)

ケラーの指摘するような「神話論的な恐れ」は、黙示録にとって、海の主要な批判ではない。「黙示録は海を政治的に描いている」、「悪の場所」「交易船が航海する場所」「もはや海はない」=「ローマの貨物船と交易の終わり」

- ・別の経済的ヴィジョン、新しいエルサレム・生命の都、新しいエルサレムは環境論的。

「テキストがわれわれに呼び起こすのは、都市的で環境的な危機、グローバルな市場経済の危機のただ中における神への信頼である。」(214)

- ・地上における神の家、都市生活のヴィジョン。地上からの脱出(携挙)ではなく、新しいエルサレムは「降りてくる」。都市的ミニストリの新しいヴィジョン

- ・贈与的経済(a gift economy): 生命の水をすべての人に値なく飲ませる。われわれがエコシステムに対してダメージを与えることへの預言者的な批判

- ・諸民族の癒やし。創世記3:22の禁止命令を克服する生命の木のヴィジョン。

↓

言語・テキスト・想像力・ヴィジョンを統一的に扱いうる方法論。想像力から倫理へ。

↓

<聖書テキスト → 言語の問題 → 環境の神学>

1. メタファー・モデル、ヴィジョンへの注目 → 構想力と人間存在

- ・メタファーとモデル: 装飾ではなく認知・経験の形態

- ・人格モデル・非人格モデル

男性モデル・女性モデル

人間の使命(自然との関わりにおける人間)

地の支配と地の僕

2. 個と共同体とをつなぐ理論はいかにして可能か? 社会的構想力、ヴィジョンの共有とは?

- ・経験—メタファー・モデル・ヴィジョン—概念・体系的思惟

|

倫理・行動

3. テキストの読解に即して。聖書読解の新しい形。

(3) メタファー論

1. 新しい理論によって乗り越えられるべき古い隠喩論（ギリシアのソフィストに始まり、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌスをへて、19世紀のレトリックについての論考において終わり告げた伝統）を次のようにまとめている（リクール, c, 76f.）。

(1) 隠喩は比喩、すなわち命名に関わる。

(2) 隠喩は言葉の字義的意味からの逸脱による命名の延長である。

(3) 隠喩のこの逸脱の理由は類似である。

(4) 類似の機能は同じ場所で使用可能であるような言葉の字義的意味から借用された言葉の比喩的意味を代用することを根拠付けることである。

(5) 代用された意味はいかなる意味論的な革新も含まない、それゆえ、我々は、代用された比喩的意味に対する字義の言葉を回復することによって、隠喩を翻訳することができる。

(6) 隠喩は革新を認めないのであるから、それは単なる言述の装飾にすぎない。したがって、言述の情動的機能として範疇化することができる。

↓

2. 新しい隠喩論は、隠喩を言葉のレベルにおける意味の逸脱としてではなく、文のレベルにおいて可能になる隠喩表現をめぐる複数の解釈の葛藤(相互作用)から可能になる新しい意味論的な革新の問題として捉える試みである。

3. レイコフ：「隠喩は詩人だけのものではない。それは日常言語に内在し、生、死、時といった抽象概念を把握するための主要な方法なのである」（レイコフ、1994、62）。

とくに科学言語における隠喩論が示すように、隠喩は科学における発見の論理に属している。「源泉領域から目標領域への写像」（「人生＝旅」「神＝父」「時間＝お金」）

4. 隠喩は、優れて現実の認知・認識（思想と経験の方法・あり方）に関わる問題であり、人間の日常的現実性の中心に位置するのである。

5. リクール：隠喩はそれを使用することによって目標領域のそれまで十分に認知されていなかった構造が顕わにするという機能を有するのであり、それは隠喩の発見的機能に関わる問題である。

6. 「私は命のパンである」（ヨハネ 6:22～59）：イエスについてのヨセフの息子（肉体と持った人間）とパンという意味の多義性ではなく、イエスをについての二つの解釈・見方の衝突による意味のよじれと、それによって引き起こされる永遠の命をめぐるイエスの出来事についての新しい意味の生成である。こうして、パンとイエスの間に写像が構成され、イエスについての一連の認知が可能になるのである。

7. レトリックの諸形態と認知あるいは思考方法

隠喩（類似関係）—換喩（metonymy、現実世界での隣接関係、空間と時間）

—提喩（synecdoche、意味世界での包含関係、類と種）

・瀬戸賢一『レトリックの宇宙』（海鳴社）、『レトリックの知——意味のアルケオロジ—を求めて』（新曜社）

↓

これから、人間の基本的な認知構造に関わっているが、特定の宗教を特徴付ける特定の認知構造は存在するか？

ヘブライズムとヘレニズムは、換喩と隠喩の対比と重なるか。ハンデルマン。

- Susan A. Handelman, *The Slayers of Moses. The Emergence of Rabbinic Interpretation in Modern Literary Theory*, State University of New York Press, 1982. (『誰がモーセを殺したか』法政大学出版会。)

In trying to understand further the underlying notions governing Rabbinic thought, let us return to the proposition that Rabbinic thought may be considered as fundamentally *metonymic*, in contrast to Greek and Patristic thought, which is essentially *metaphoric*. (76)

- 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辞——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュストモス』教文館、2004年。

8. 宗教的現実・実在（神の国）とはいかなるものか。

言葉の出来事 (Sprachereignis, Wortgeschehen) → 正典・靈感とは何か。動的靈感説。

上田光正『聖書論』日本基督教団出版局、1992年。

9. 隠喩が隠喩と機能するために→「個と共同体」をつなぐ理論構築（イメージとコミュニケーション）

- 語用論：Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983. (『英語語用論』研究社出版)

- 心理学・認知科学：芳賀純・子安増生編『メタファーの心理学』誠信書房、1990年。

山梨正明『比喩と理解』(認知科学選書17) 東京大学出版会、1988年。

- 「意味論というのは、問題となっている表現の文字どおりの意味、あるいは言語規則的内容の特性を表示するだけのものである。語用論のほうは、意味論から得られる意味表示に、文脈から得られる詳細の情報を加え、それによって、メタファー的解釈を与えることをしなければならないであろう。」(レヴィンソン、190)
- 「メタファーの解釈は、類推的にものを考えてゆく我々の一般的能力の特性に依存しなければならない。」(196)
- 「心理学の理論からかなり大きな助けを借りない限り、言語学的語用論だけでそのような一般理論を提供できると考えることはできないとしてよいであろう。もし分業ということが考えられるなら、心理学者の仕事は、類推に関する一般理論を提供することであり、他方、語用論学者の仕事は、そのような解釈を受けるような発話を特定し、どのようにしてそれらが認定され構成されるのかということの説明し、そしてそれらが用いられるときの条件を説明することになるであろう。」(196-197)